

## 高木貞敬先生 を偲んで

金沢医科大学・生理学 I  
小野田 法彦



生理学会特別会員、群馬大学名誉教授・高木貞敬先生は病氣療養中のところ、去る平成9年10月11日午前、静かに永眠されました。享年78歳。

去る平成9年10月18日午後、前橋教会にて群馬大学医学部・小澤壽二教授を葬儀委員長として、莊厳に告別式が行なわれました。故人を偲んで参列いただきました会員の方々に感謝申し上げます。

高木先生は「嗅覚」研究の世界的な第一人者であり、この領域の発展に非常に大きく貢献されました。高木貞敬先生は1919年3月19日に京都市に生まれ、1944年9月に東京帝大医学部を卒業し、直ちに海軍々医となられ終戦を迎えました。1946年東大医学部・生理学教室に入局。1954年～1957年、米国イリノイ大学の Gerard 教授のもとに留学され、Gerard 教授らが世界で初めて考案したガラス管微小電極を用いて、大村 裕先生(現九大名誉教授)と「カエル嗅球の律動的脳波の発生機序」の研究を行いました。しかし、この研究は論文を書くところまで至らなかったようですが、帰国後、先生のライフワークである「嗅覚」研究の出発点となりました。1957年、群馬大学に第二生理学教室の初代教授として着任後、「嗅覚」をライフワークとして研究を開始し、1984年3月の定年退官まで続けられました。

群馬大学在職中の前半約15年は、主に嗅上皮を中心とした研究であり、後半約15年は、主に嗅覚中枢の仕事です。前半には Nature 2 編を含む多くの優れた論文を発表されました。後半の研究は会員の皆

様もご承知のように、前頭葉眼窩回に嗅覚中枢のあることを世界で初めて見いだされたことであります。若い時にすばらしい研究をされる方が多いが、晩年に期待された程の成果をあげることが出来ないのが常である中であって、晩年に大きな花を咲かせたまさに大器晩成型の研究者であったと思います。

先生は研究面でも優れた成果を次々に発表されると同時に、21世紀は脳の時代であることを見通しておられたように、脳について啓蒙的活動を文筆を通して行われました。さらに、先生は生理学的研究にとどまらず、嗅覚障害の診断に重要なオルファクトメーターの開発に積極に取り組み、嗅覚検査を聴覚検査と同様に保険対象と認定させました。1984年には、前橋で行われた第61回日本生理学会大会を主催され、参加された多くの会員より感謝の言葉をいただきました。定年後は、主に、先生のライフワークである嗅覚研究の成果をまとめるために全力を挙げられ、「Human Olfaction」の執筆に取り組み、大著として世に出されました。その年、永年の功績に対して、勲二等瑞宝章を受けられました。

日本生理学会としては、巨星を失ったことになりましたが、先生に教えを受けた者といたしましては、より良い研究成果を挙げるのが先生に報いる唯一の方法であると肝に命じております。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

平成9年11月10日